

創世記15章「アブラムへの神の約束」

15:1 これらの出来事の後、【主】のことばが幻のうちにアブラムに臨み、こう仰せられた。「アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」 15:2 そこでアブラムは申し上げた。「神、主よ。私に何をお与えになるのですか。私には子がありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。」 15:3 さらに、アブラムは、「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さないで、私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう」と申し上げた。 15:4 すると、【主】のことばが彼に臨み、こう仰せられた。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」 15:5 そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」 さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」 15:6 彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。 15:7 また彼に仰せられた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデヤ人のウルからあなたを連れ出した【主】である。」 15:8 彼は申し上げた。「神、主よ。それが私の所有であることを、どのようにして知ることができましょうか。」 15:9 すると彼に仰せられた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩とそのひなを持って来なさい。」 15:10 彼はそれら全部を持って来て、それらを真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。しかし、鳥は切り裂かなかった。 15:11 猛禽がその死体の上に降りて来たので、アブラムはそれらを追い払った。 15:12 日が沈みかかったころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして見よ。ひどい暗黒の恐怖が彼を襲った。 15:13 そこで、アブラムに仰せがあった。「あなたはこの事をよく知っていないなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。 15:14 しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。 15:15 あなた自身は、平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。 15:16 そして、四代目の者たちが、ここに帰って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。」 15:17 さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。 15:18 その日、【主】はアブラムと契約を結んで仰せられた。「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。エジプトの川から、あの大河、ユーフラテス川まで。 15:19 ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、 15:20 ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、 15:21 エモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人を。」

導入

今日は、創世記15章を学んでいきたいと思います。先週に13章を学んだので、14章のあらすじをここでご紹介し、15章への導入とします。

14章における3つの重要ポイント

1. ソドムとゴモラの王たちや近隣の町は、12年間エラムの王に支配されていました。

その後、ソドムとゴモラの王たちは、エラムの王に背きました。「塩の海」の辺りで戦いが起こりました。その結果、ロトは連れ去られ、彼の財産も奪われました。その戦いから逃げてきた人が、アブラムに甥のロトが捕らえられたことを知らせました。

2. アブラムは、甥のロトを助けに行くことに決めました。

アブラムはロト救出のために、318人のしもべを連れて出かけました。

アブラムは、しもべたちをグループに分けて夜に奇襲をしかけるという戦略を立てました。そして、夜の奇襲は成功し、ロトと財産、女や子どもたちを取り戻すことができました。

先週の聖書箇所には、ロトがソドムの近くまで天幕を張ったとありました。その選択がすでに災いを招いています。しかし、神の恵みによって、アブラムがロトを助け出しました。

### 3. アブラムが無事ロトを救いだして戻ってくると、ふたりの王たちが彼を迎えました。

ソドムの王とシャレムの王です。

シャレムとは、エルサレムの別称です。シャレムの王メルキゼデクは祭司でもあり、出てきてアブラムを祝福しました。

ここで興味深いのは、メルキゼデクが天地の所有者であるいと高き神の御名によってアブラムを祝福したことです。

唯一まことの神に対するカナン人の反逆が横行する中で、明らかにこの王はまことの神の知識を手放していない人でした。

また、メルキゼデクはアブラムとしもべたちにパンとぶどう酒を与えました。アブラムは、すべての十分の一をメルキゼデクに与えました。このことから、モーセの律法が制定されるずっと前に十分の一のささげものがあつたことがわかります。また、アブラムがメルキゼデクを敬っていたこともわかります。彼の名は、「正義の王」という意味です。聖書に登場するのはほんの少しですが、彼の存在を無視することはできません。というのも、詩篇110：4ではダビデが彼について語り、新約聖書ではヘブル7章でも彼について記されています。メルキゼデクは、キリストの型と見なされているようです。学者の間でも意見の相違はありますが、「予型論」という解釈を私自身も支持します。

ソドムの王は、この状況に首を突っ込もうとします。彼は、「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」とアブラムに言いました。ソドムの王は、アブラムを手なずけようとしたわけです。しかし、アブラムはこの申し出に興味を示しませんでした。彼はすでにメルキゼデクに十分の一を与えて、忠誠を宣言していました。

彼は、「私は天と地を造られた方、いと高き神、【主】に誓う。糸一本でも、くつつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あなたが、『アブラムを富ませたのは私だ』と言わないためだ。」と言いました。

アブラムは、邪悪な王の指図や支配を受けることを断固拒否しました。

これらの背景を念頭に、今日の本題となる15章へと話を進めていきましょう。

15章は、創世記の中でも非常に重要な箇所です。この箇所で、神の約束が契約をとおして追認されているからです。

創世記8章で、神は被造物と契約を結ばれました。神は、「地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない。」（創世記8：22）と約束なさいました。

今度は神が、12章で約束なさいたことについてアブラムと契約を交わそうとなさいます。

この15章は、以下のとおり、3つの部分に分けてお話ししましょう。

1. 神の約束は恐れを取り去る。（1-5節）
2. 神の約束は信仰を励ます。（6-8節）
3. 神の約束は未来を明かす。（9-21節）

## 1. 神の約束は恐れを取り去る。(1節)

15章の最初のことばは、「これらの出来事の後」です。さきほど大まかに14章の流れをお話しましたが、「これらの出来事」が指す内容は、アブラムが「いと高き神」に忠誠を宣言し、ソドムの王の支配を拒絶したことです。

アブラムは、神を恐れない王から得る富を退け、十分の一を忠実にささげて、天地を作られた神を信頼しました。

ソドムの王からの巨額の財産の申し出を断ったアブラムは、多少なりとも恐れを感じていたでしょう。それで、神がまずアブラムに語られたのは、「恐れるな。」という言葉でした。神は、アブラムの心の内や考えをご存知でした。アブラムは正しいことをしましたが、それによる恐れもありました。

神は、ご自身がアブラムの盾であるとおっしゃいました。つまり、アブラムをしっかり守ると言ってくださったわけです。また、とてもすばらしい報いも約束してくださいました。それは、神を恐れない裕福な王ではなく、神ご自身がアブラムに報いを与えてくださるという約束です。

ここで私たちは、この話の内容を踏まえて神の約束を捉えなければなりません。

アブラムは、よこしまな王が与えるといった財産を拒み、正義の神が与えてくださると信じる選択をしました。

ここに、信仰の教訓があります。クリスチャンであるあなたが経済的に苦しくなったり、苦境に立たされたりしたら、神を頼りにしなければなりません。そして、自分が属している教会に助けを求めましょう。神を恐れない人を頼らないようにしましょう。その人たちは、状況を自分の得になるように利用しようとする可能性があるからです。

では、聖書個所に戻ります。

アブラムの心には、それでもまだ不安が残っていました。

神がアブラムを祝福なさるという約束が成就する気配のないまま、時間が過ぎていました。どれくらいの時が経ったかははっきりわかりませんが、12章と17章では24年間の時が流れています。ですから、現実的に見て、アブラムが徒歩でエジプトに行って帰って、戦いをしたことを考えると、少なくとも5年以上は経っていたでしょう。

ですから、最初に神がアブラムに約束なさったときから、ずいぶん経っていました。アブラムがこの状況で不安を感じるのは当然です。

アブラムが不安を感じたのは、「約束と現実の狭間」にいたからです。

神から約束をいただいたものの、彼の身に何の変化も起きていませんでした。

アブラムは神に言いました。「神、主よ。私に何をお与えになるのですか。私には子がありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。」なぜアブラムはこんなことを言ったのでしょうか。

それは、約束からずいぶん経ったのに、まだ子どもがいなかったからです。

もしかすると、神はアブラムをとおして地上の家族を祝福されるという意味だったのでしょうか。それならアブラムが必ずしもその人々の血縁の父祖ではないかもしれません。

3節で、アブラムは、主人に子がいない場合はしもべが跡取りとなる習慣について神に話します。

4節では、神がアブラムに答えておっしゃいました。「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」

神はここで、祝福の約束は彼の子孫に与えられることを明らかになさいました。他の誰でもない、直系の子孫です。

神はアブラムを外に連れ出されました。時間は夜で、外は真っ暗でした。神はアブラムに、空を見上げて星を数えなさいとおっしゃいました。そして、その空の星のように子孫が多くなると約束なさいました。

神は、13：16でアブラムに約束されたことばをここで繰り返しておられます。

創世記 13:16 わたしは、あなたの子孫を地のちりのようにならせる。もし人が地のちりを数えることができれば、あなたの子孫をも数えることができよう。

ただし、この時は、地のちりではなく、空の星にたとえ、星を見せてくださいました。

アブラムは、毎晩星を見上げては、神の約束に思いを巡らすことができたでしょう。

## 適用

ここで、私たちの生活に当てはめて考えてみるのが大切です。神はご自身のみことばである聖書をとおして、今も語っておられます。神の子とされた人には、個人に対する約束やすべての信徒への約束が与えられます。

しかし、約束と現実の狭間に生きるのは、たいへんなこともあります。私たちもアブラムのように、神が与えてくださった約束を正しく理解したのだろうかと不安になったりします。

与えられた約束が成就するのにどれくらい時間がかかるのだろうかと思うこともあります。私たちは、今すぐ、遅くとも数週間のうちに物事が展開すると思いがちです。

しかし、神は常にご自身のタイミングで働いておられます。私たちのタイミングに合わせて動かせません。

何度もお話して申し訳ないのですが、この話題にぴったりの例話はこれしかないのもたまたま話します。

1992年に、私たち夫婦は4人の子どもたちを連れて日本を離れました。当初は、英国で所属していた宣教団体に宣教報告をするため1年間帰国する予定でした。そのとき、ウェンディは神から創世記28：15の約束をいただきました。

創世記 28:15 見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

翌年の1993年が過ぎても、私たちは日本に戻れませんでした。その後23年経っても、まだ宣教のために日本に戻ってはいなかったのです。ウェンディは、神のことばを聞き間違ったのでしょうか。神は本当に、私たちを日本に連れ戻すとウェンディに約束なさったのでしょうか。

もちろんそうです。けれども、私たちの思う時にそうなるとは約束されませんでした。神の時にそれは実現したのです。

神の時は常に最善だからです。神は23年間かけて、私たち夫婦を将来の日本での働きのために備えてくださいました。ご自身が約束なさったことを成就する力を、神はお持ちです。

私たちの役割はただ神を信頼することです。そして、タイミングを含め、あらゆる詳細を神にお任せすることです。

今ここに、神が何年も前に与えてくださった約束が成就するのを待っている人がいるかもしれません。

神にお任せしましょう。そうすれば、神がご自身のタイミングで実現してくださいます。そうなったあかつきには、神の時こそ最善であることに気づくでしょう。

神がアブラムとサライに子どもを与えると約束なさってからイサクが生まれるまで、約25年間です。ふたりは、ずいぶん長い間、子どもが生まれるのを待ちました。

## 2. 神の約束は信仰を励ます。(6-8節)

6節は、旧約聖書の中でも重要な個所です。

15:6 彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

この個所は、信仰による義認という教えにおいて、旧約聖書と新約聖書をつなぐ役割を果たします。

アブラハムの信仰は、彼の義と認められました。これは、彼が割礼を受ける前であり、律法が子孫に与えられる400年以上前のことです。

この個所をできるだけわかりやすく説明したいと思います。私たち全員が理解する必要があるからです。

「彼は主を信じた。」という部分は、理解できると思います。

それは、彼が神のおっしゃったことを信じたということです。神のことばに信仰を置きました。神が信頼できるお方だとわかっていたのです。神のみを信用していました。

本物の信仰は、感情ではなく事実に基づきます。椅子に座る時、ちゃんと体を支えてくれると信じて座ります。その椅子に対して素敵な感情を抱くからではありません。椅子がそこに実際にあると見て、その事実に基づいて座ります。

アブラムの信仰は、事実に基づいていました。それは、神の約束という事実でした。

簡単な算数です。

あなたに息子が与えられると神がおっしゃった。+ 神は全能の創造主なる神である。

=アブラムには息子が生まれる。

私たちがどれだけ信仰深いかの問題ではなく、誰に信頼をおくかが重要です。

アブラムは、主を信じました。私たちもそうであることを願います。

ここで、神はそれを彼の義と認めたとおっしゃいます。

この部分を、「credit」と訳した英語の聖書もあります。

「credit」という単語は、簿記の「貸方」を意味する単語で、金銭の貸借と関わる意味があります。銀行口座でいうと、「預かり金」が増えると残高が増えます。

まず、アブラムを含むすべての人間は、借りがあることを覚えておく必要があります。

罪の結果、私たちは皆、罪の口座から多く引き出しすぎました。私たちの霊の口座には義がまったくありません。

この部分では、神がアブラムにこうおっしゃったようなものです。

「アブラム、あなたはわたしを信じたので、あなたの罪の口座を前もって清算してあげよう。私の完全さをあなたの霊の口座に入れてあげよう。あなたの罪の借りは私があらかじめ払ったと考えてよろしい。わたしがあなたに与えるわたしの義のおかげで、あなたの今の借りが帳消しになるだけでなく、天国でわたしとともに住むのに必要な完全さもすべて与えられたのだ。」

こういうわけで、パウロはローマ4章で、信仰によって神を信頼する例としてアブラムを挙げているのです。

ここで、ローマ4章をお読みしたいと思います。わかりやすくするため、リビングバイブルから読みます。

1-2 この問題について、アブラハムの場合を考えてみましょう。アブラハムは、人間的に見れば、私たちユダヤ民族の先祖にあたります。信仰によって救われる問題について、彼はどんな経験をしたのでしょうか。彼が神様に受け入れられたのは、良い行ないをしたからでしょうか。もしそうなら、彼は誇れたはずですが。しかし、神様の目から見ると、アブラハムには、誇る理由などみじんもありませんでした。

3 というのは、旧約聖書に「アブラハムは神様を信じた。だから、神様はアブラハムの罪を帳消しにして、『罪のない者』と宣言された」と書いてあるからです。4-5 しかし、アブラハムが天国に行く資格を得たのは、良いことをしたからではないでしょうか。違います。救いは贈り物として与えられるものだからです。もし善行によって救われるとすれば、もはや無料ではなくなってしまう。ところが、救いは無料なのです。救いは、自分の力で手に入れようとしない人にこそ与えられます。なぜなら、罪人が、キリスト様は自分を神様の怒りから救い出してくださいと信じきる時に、神様は彼らを、正しい者と宣言してくださるからです。6 ダビデ王は、救われる値打のない罪人が、神様から「罪のない者」と宣言される幸いについて、こう言っています。7 「罪を赦された者、罪をすっかり消された者は、なんと幸いだらう。8 もはや主に罪を数え上げられないですむ人の喜びは、どんなだらう。」9 すると、次のような質問が出て来ます。この祝福は、キリスト様を信じた上に、さらにユダヤ教のいろいろなおきても守っている人にだけ与えられるのでしょうか。それとも、ユダヤ教の規則は守らなくても、ただキリスト様を信じてさえいれば与えられるのでしょうか。アブラハムの場合はどうだったのでしょうか。「アブラハムは信仰によってこれらの祝福を受けた」と言われています。それは、ただ信仰だけによったのでしょうか。それとも、ユダヤ教のいろいろな規則も守ったからなのでしょうか。10 この質問に答えるためには、まず、次の質問に答えなければなりません。神様はいつ、アブラハムにこの祝福をお与えになったかということです。それは、彼がユダヤ人になる前——すなわち、ユダヤ人として認められるための儀式である割礼を受ける前——のことでした。11 アブラハムが割礼を受けたのは、神様が彼をその信仰のゆえに祝福すると約束された時より、もっとあとのことです。割礼の儀式が行なわれる前に、アブラハムはすでに信仰を持っており、神様はすでに彼を受け入れ、ご自分の目から見て正しい者、良い者と宣言しておられました。割礼の儀式は、そのしるしだったのです。こうしてアブラハムは、ユダヤ教のいろいろなおきてに従わなくても、信じて救われる人々の、信仰の父とされています。ですから、これらの規則を守っていない人々も、信仰によって神様から正しい者と認めていただけることが

わかります。 12 アブラハムは同時に、割礼を受けているユダヤ人の、信仰の父でもあります。 ユダヤ人は、アブラハムの例から、自分たちはこの割礼の儀式によって救われるのではないとわかるはずです。 なぜなら、アブラハムは、割礼を受ける前に、ただ信仰によって神様の恵みを受けたからです。 13 そういうわけで、全地をアブラハムとその子孫に与えるという神様の約束は、アブラハムが神様のおきてに従ったからではなく、神様は必ず約束を果たしてくださる、と信じたからこそ与えられたことは明らかです。 14 にもかかわらず、神様の祝福は「完全に善良な」人に与えられると主張するなら、「信仰を持つ者に対する神様の約束なんか意味がない。 信仰なんかばかげてる」と言っているのと同じです。 15 ところが、実際には、神様のおきてを守ることによって神様の祝福と救いとを得ようと努力しても、結局は、神様の怒りを招く結果に終わるだけです。 なぜなら、それを守ることなど、とうていできないからです。 おきてを破らないためには、破るようなおきてを持たないにかぎります。 16 そういうわけで、神様の祝福は、無代価の贈り物として、信仰によって与えられるのです。 ユダヤ人の習慣に従うか否かに関係なく、アブラハムと同じ信仰を持っているなら、神様の祝福を確実にいただけるのです。 信仰の面から言えば、アブラハムは、私たちみんなの父です。 17 旧約聖書に、神様はアブラハムを多くの国民の父とされた、とあるのは、この意味にほかなりません。 神様は、どこの国の人でも、アブラハムと同じように、神様に信頼する者を、みな受け入れてくださるのです。 神ご自身が——そうです。 死人を生き返らせ、未来の出来事を、すでに実現したかのような確実さでお語りになる、神ご自身が——そう約束しておられるのです。 18 神様はアブラハムに、「あなたに一人の男の子を授けよう。 その子から多くの子孫が生まれ、偉大な民族となるのだ」と言われました。 この時アブラハムは、そんな約束はとうてい実現するとは思えなかったにもかかわらず、神様を信じました。 19 アブラハムの信仰は強かったので、百歳の自分が、もう父親になれる年ではないことも、また九十歳の妻サラが子供を産めるとは思えないことも、気にかけてませんでした。 20 アブラハムは少しも疑うことなく、ひたすら神様を信じ、その信仰と信頼はますます強くなりました。 彼は、そのことがまだ実現しないうちから、その祝福のゆえに神様を賛美しました。 21 神様の約束はどんなことでも実現すると、堅く信じていたのです。 22 この信仰のゆえに、神様は彼の罪を赦し、「罪のない者」と宣言してくださったのです。 23 ところで、「彼は信仰によって神様に受け入れられ、正しい者と認められた」という、このすばらしいことばが書かれたのは、ただアブラハムのためだけでなく、 24 私たちのためでもあったのです。 それは、主イエスを死人の中から復活させた神様の約束を信じる時、神様がアブラハムと全く同様に、私たちをも受け入れてくださることを保証しています。 25 主イエスは、私たちの罪のために死にました。 そして私たちを、神様との正しい関係に入れ、神様の恵みで満たしてくださるために、復活なされたのです。

パウロはガラテヤ3：8-9でこのように語ります。

8 聖書は、信仰を持った外国人が救われる、この時のことを、予告してきたのです。 神様がずっと昔、アブラハムに、「どこの国の人であろうと、あなたのようにわたしを信頼する人を、祝福しよう」と宣言された時、このことを意味しておられたのです。 9 そういうわけで、キリスト様に信頼する人はみな、アブラハムと同じ祝福をいただくのです。

私たちの場合、主イエス・キリストが救いと天国での永遠のいのちをくださると信じているのですから、同じことです。

私たちが神のみことばの事実に信仰を置き、心で信じて口で告白します。そうすれば、神は私たちの霊の口座に義を入れてくださいます。

もしあなたがまだクリスチャンでないなら、パウロのように天から輝く光を見たり轟きを聞いたりしないとクリスチャンにはなれないと思わないでください。ただ、イエス・キリストをとおして救いを与えるという神のことばを信じればよいのです。

もし今クリスチャンでないなら、次の聖書の個所をぜひ読んでみてください。

1. 創世記1-3章
2. ヨハネ r 1-3章
3. ローマ人への手紙1-3章

この9章分の個所を読めば、神と罪とイエス・キリストについて知らなければならない内容を知ることができます。

### 3. 神の約束は未来を明かす。(8-21節)

8節で、アブラムは神に「神、主よ。それが私の所有であることを、どのようにして知ることができましようか。」と問いかけます。

アブラムは、まだ確信できなかつたようです。アブラムが確信できるように、神は何をしてくださったでしょう。これはとてもすばらしいことです。私たちにも現実的にあてはめられる内容です。

まず、この時代に人々が契約を交わす方法について説明しましょう。

当時の契約は、破棄することができませんでした。非常に真剣な合意事項でした。その方法は次のようなものです。

動物をふたつに割き、契約の当事者双方が契約締結のために割かれた動物の間を歩きます。

それには、次のような意味がありました。もし契約の内容を破ったら、あなたはこの動物のように私をふたつに割くことができる、という誓約です。このような契約の習慣は一般に浸透していました。

では、9-10節を読みましょう。

**15:9** すると彼に仰せられた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩とそのひなを持って来なさい。」 **15:10** 彼はそれら全部を持って来て、それらを真つ二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。しかし、鳥は切り裂かなかった。

アブラムには、神がアブラムと契約を結ぼうとしておられることがわかりました。しかし、当時の一般的な方法と少し違う部分がありました。

その違いとは、双方が動物の間を歩かなかつたことです。神だけが、煙の立つかまどと、燃えているたいまつのかたちで動物の間を進まれました。

これは非常に重要なポイントです。それは、神だけがこの契約を守る責任があると神ご自身がおっしゃつたことになるからです。

これが非常に重要な理由を後ほど説明します。

このようなことが起こっているときに、神はアブラムに将来の子孫について語られました。

15:13 そこで、アブラムに仰せがあった。「あなたはこの事をよく知っていなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。15:14 しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。15:15 あなた自身は、平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。15:16 そして、四代目の者たちが、ここに戻って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。」

これは、アブラムとその子孫についての驚くべき預言です。

この預言は完全に成就しました。ユダヤ人はエジプトで400年間奴隷にされましたが、確かに多くの財産を持ってその地を離れました。アブラムも長寿を全うしました。

16節の最後には、神の恵みについての知恵があらわれています。エモリ人の咎がまだ満ちていないとあります。つまり、神はエモリ人に悔い改めの機会を与えておられるのです。しかし、彼らは邪悪さを増す一方で、最終的には神がご自身の民をとおして裁かれました。

最後に18-21節で、神はアブラムと子孫に約束なされた土地の規模を明らかになさいました。ユダヤ人は、神が約束なされた土地のすべてを獲得したことがありません。しかし、クリスチャン・シオニズムの教えでは、いつかそれが実現すると信じられています。

スクリーンの地図には、現在のイスラエルの国境が表示されています。

イスラム教過激派組織 IS は、神がユダヤ人に約束なされた地域を占領しようとしています。なぜでしょう。

それは、ユダヤ人とその国家を破壊しようとしているからです。

しかし、IS がイスラエルの国を破壊しようとするれば、神はイスラエルが IS を破壊するようになさるでしょう。そうすることで、イスラエルはその土地を占領することになり、アブラムに与えられた約束が成就することになります。世界情勢のニュースを注意して見てください。

では、15章から私たちが日常生活に応用できる教えは何でしょう。

すでにいくつかの適用ポイントをご紹介したので、ここでは一番大切なポイントをひとつだけお話ししたいと思います。

17節で、契約を締結するために動物の間を進んだのは神だけでした。

アブラムはそのとき、神によって深い眠りに落ちていました。ですから、そうしたいと思っても契約の一端を担うことはできませんでした。これが人間同士の契約であるなら、割かれた動物の間をいっしょに歩かなければなりませんでした。

しかし、神がアブラムに教えようとなされたのは、契約を成就する神ご自身の責任についてです。

これは、将来アブラムの子孫と結ばれる神のもうひとつの契約を指し示します。私たちはこの契約を信じるならば、アブラムの子孫です。

では、エレミヤ31：31を読みましょう。

エレミヤ31:31 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。

次に、マルコ14：22-26を読みましょう。

14:22 それから、みなが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福した後、これを裂き、彼らに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしのからだです。」 14:23 また、杯を取り、感謝をささげて後、彼らに与えられた。彼らはみなその杯から飲んだ。 14:24 イエスは彼らに言われた。「これはわたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。 14:25 まことに、あなたがたに告げます。神の国で新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」 14:26 そして、賛美の歌を歌ってから、みなでオリーブ山へ出かけて行った。

ここでもまた、イエスによる「契約」を成就する責任は神のみにあります。

ここに最大の適用ポイントがあります。

8節で、アブラムは神に、土地を受け継ぐことをどうやって知るのかと尋ねました。

神は、ご自身にしか成就できない契約をアブラムと結ぶことでそれに応えてくださいました。これは、神の責任だったわけです。

この会堂で聞いている皆さん、またはネット上で聞いている皆さんの中には、「聖書が真実だとどうすればわかるのだろうか。神が私を愛しているとどうやって知ることができるのか。神が実在することをどうやって知ることか。」と思っている人もいるかもしれません。

その答えは、イエス・キリストが新しい契約を成就したので知ることができる、です。イエスは、2000年前にあなたのために十字架で血を流し惨い死を遂げられました。

神によってすでに業はなされました。イエスにある神の契約を成就するために、私たち人間ができることは何ひとつありません。神はすべての業をなしてくださいました。

私たちがすべきなのはただ信じることです。

ローマ10：9-13は、次のように語ります。

10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。 10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。 10:11 聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」 10:12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあらわれるからです。 10:13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。

アーメン。